

～**苗立枯れ病、もみ枯れ細菌病予防について**～

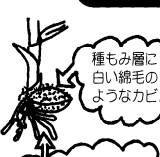
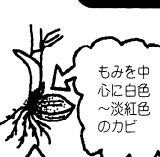

今春は朝の最低気温が平年より低い日が多いものの、日中の気温や日照時間は平年を上回っている日が多く、浸種期間の吸水は概ね良好と予想されます。

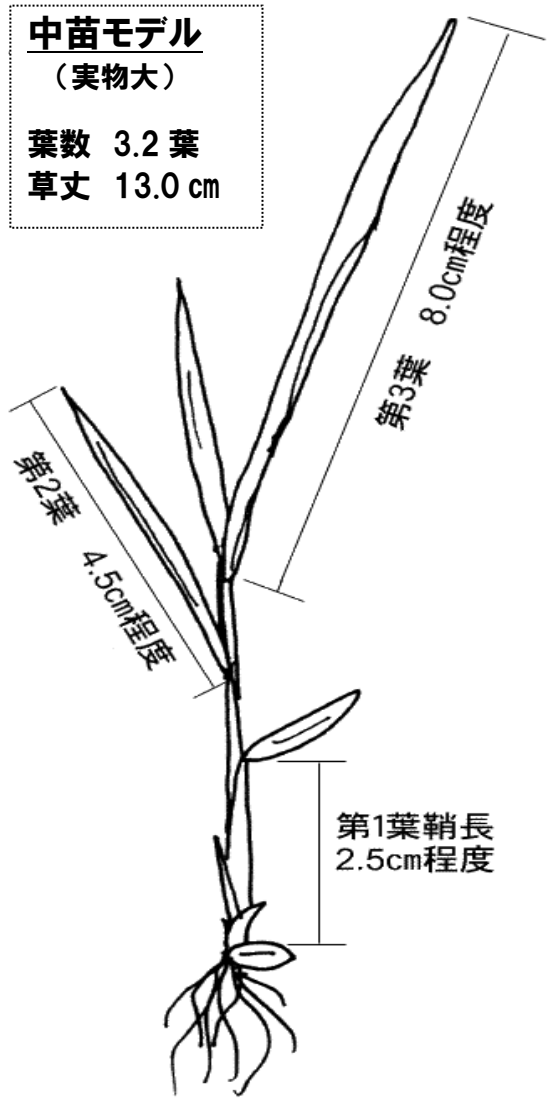
また、催芽機等で加温されている方は吸水が進み、催芽時間が早まる場合も考えられますので、発芽状態をこまめに確認してください。

なお、播種後に低温日が続くと苗立枯れ病等の発生が懸念されますので、症状が見えた時は以下を参考に防除に努めてください。

1. 苗立枯れ病

《育苗期に発生する主な病害の特徴》

<p>リゾープス属菌</p>  <p>種もみ層に白い綿毛のようなカビが種もみ層に繁殖し出芽2～3日で箱全体をおおうようになり、やがて灰白色になる。</p> <p>根は短く、先端はふくらんでいる</p> <p>出芽中白い綿毛のようなカビが種もみ層に繁殖し出芽2～3日で箱全体をおおうようになり、やがて灰白色になる。</p> <p>苗の生育は悪く、黄緑色に退色する。根の先端はふくらんで伸びが悪い。</p>	<p>フザリウム属菌</p>  <p>もみを中心に白色～淡紅色のカビがまん延している。</p> <p>根も褐変</p> <p>出芽後苗の伸びが悪く、地際部が褐変し、もみを中心に白色～淡紅色のカビがまん延している。</p> <p>茎基部をカミソリで割ると褐変している。この菌は苗が弱った時に発病しやすい。</p>
<p>ピシウム属菌</p>  <p>地際部が褐色で水浸状となっている</p> <p>地際部にカビは認められない</p> <p>フザリウムとよく似ているが、地際部の褐色はやや淡く、水浸状になり、急に萎凋枯死する。</p> <p>地際部にカビは認められない。</p> <p>茎基部をカミソリで割ると褐変や水浸状に変化している。</p>	<p>トリコデルマ属菌</p>  <p>かさぶた状のカビ</p> <p>根は短く数も少ない</p> <p>苗の被害はフザリウム属菌に似ているが、葉の黄化が特にひどい。カビはかさぶた状ではじめは白く後、青色となり地際部や、もみのまわりにかたまりとなつてみられる。</p> <p>根は短く数も少なく、褐変し生育不良となる。</p>



2. 苗立枯れ病防除薬剤

時期	薬剤名	濃度及び散布量 (箱当り)	苗立枯病菌の種類			
			リゾープス	ピシウム	フザリウム	トリコデルマ
発芽後 灌注	タチガレエースM液剤 注)	500倍、500ml/箱	—	○	○	
	ベンレート水和剤	500倍、500ml/箱	—			○

※ 発病後のリゾープス菌の防除薬剤は無いため、シルバーポリは発芽後早めに除去する。
注) 床土にタチガレエースM粉剤及び播種時にタチガレエースM液剤を使用しなかった場合は、発芽後にタチガレエースM液剤500倍希釈液を灌注する。

3. もみ枯れ細菌病・高温障害対策

播種後に高温が続くと出芽前に被覆内の温度が高くなり過ぎ、「もみ枯れ細菌病」や苗ヤケ等の「高温障害」が懸念されます。もみ枯れ細菌病は、初期の高温が発生の要因となります。ハウス内温度が30℃以上の日中は側面のビニールを開け、換気に努めてください。